

照

応

片山敏彦著作集 第七卷

片山敏彦著作集 7

© 1972 Misuzu Shobo

1972年5月30日 第1刷発行

¥ 900.

著 者 かた やま とし ひこ
片 山 敏 彦

東京都文京区本郷3丁目17-15

発 行 者 北 野 民 夫

東京都新宿区改代町24

印 刷 者 田 中 昭 三

発行所 東京都文京区
本郷3丁目17
郵便番号 113 株式 会社 **みすず書房**
電話 814-0131(代)
振替東京 195132

(第8回配本)

理想社印刷・鈴木製本

目 次

I

照 応	7
象徴性の賭け	13
様式への愛	22
創造的な理解	34
ギリシヤ的精神について	46
生活の秩序	58
喜悦の鍛錬	71
ヴィジョンと形	82

知解と透徹	97
文化の交流	109
日本文化の弱さ	121
遠来の客	125
II	
ゲーテと鷗外	137
鷗外とリルケ	143
利玄とリルケ	150
雪舟とモーツァルトの年に	160
ドイツにおける日本の詩歌	171
フランスの短詩	177

3 目 次

芭蕉・・・・・・・・・・・・・・・・	183
パラマスとリルケ・・・・・・・・	194
ゲーテとヴァレリーとの出会い	201
クルチウス論・・・・・・・・・・	211
III	
「永遠に女性的なるもの」	225
優しく強き母性・・・・・・・・	234
回想と展望・・・・・・・・・・	240
——マルヴィーダとベルタ・シュライヘア——	

I

照 応

1

ドイツ文学作品の代表作の一つ、ノヴァーリスの『青い花』が、近頃岩波文庫の小牧氏の訳で出たため、これを読んで私は再び、文学芸術の表現作用における照応の理ということ考えた。照応とここで言うのは、ボードレールがあの詩『照 応』コレスポンダンスの中で用いたような意味による。——人は具体的实在の世界の中を、あたかもさまざま象徴の森をくぐるようにして通る。するとそれらの象徴は「親しまなざし」で人を眺める。そして、象徴と象徴とのあいだの照 応コレスポンダンスは、「遠いところから来て互いに呼応して融け合う長い木魂こだまのようであり」また「夜や光やのようよるに広大である。プレイヤード版の註によると、ボードレールによって重要なものとなったこの思念イデーは、彼がアマデウス・ホフマンの或る作を読んだときに突然明瞭に心に浮かび上ったと書いてあるが、してみるとここにもドイツ浪漫派とフランス象徴派とのあいだのきわめて生きた内的な関係、すなわち一つの興味ある照 応コレスポンダンスがあると言わなければならない。

照応の芸術表現は、それが高く美しいものであればあるほど、照応の構成要素を概念でとらえることが困難だ。たとえば芭蕉の――

この秋は何で年寄る雲に鳥

という驚くべき象徴表現の中に、私は何ものかが照応し交響している妙なる音を聴きながら、しかもその音楽の要素を概念化することができない。

また私は、アランの書いたゲーテについての論文を読んだときに、その重要な個所で、これに似たことをいつかどこかで読んだと感じた。似たことというのは、同じ観念・同じ知識という謂でなしに、心底へ起こす反響の質が似ている、という謂である。それで私は、この響きに基づいて回想の糸を辿った。この点書物は都合がいい。私が身勝手に回想しているあいだ、書物は同じページをひらいたままで、秋の灯に親しみながら待っていてくれる。さて私の追想は、記憶の不安定な薄闇をさぐりながら、別の本、別の精神、別の姿を訪ねてゆく。さてこのばあい、その別の姿というのはケール博士の姿だった。これは私自身まったく予期しなかったことである。さきほどまで私には、フランスのアランと、ケール博士の著作とのあいだにはなんの関係も類縁もなかった。ところでアランがゲーテについて語るのを読んだら急にその間につながりができた。「そんなことはまったく気まぐれな、主観的な夢みたいなことだ、つまり君だけに関することだ」と私の友達は私に言うだろうか？ そう言われればまったくそのとおりだ。客観性のないことだ。しかし、こんなときの客観性とはいったいな

んだらうか？ 私としてみると、この突飛な連想の契機がゲーテだったことに意味がある。元来高等学校三年の医科のクラスで教科書としてゲーテの『タウリス島のイフィゲーニエ』を読まなかったら自分は大学のドイツ文科へは行かなかつたらう。ドイツ文学作品の中には、『イフィゲーニエ』のようなものがたくさんあるだろうと期待していたが、この期待は必ずしも当らなかつた。ところでアランとゲーテの『イフィゲーニエ』の姿が浮かび上がる。姿というのはそれを取り巻く空気の精神的な特長、つまり詩を伴つての姿である。その姿は何を示すか？ それは古代精神とキリスト教精神とのきわめて稀有な合体の姿である。古代精神・ギリシャ精神の特長は何か？ それは我ならぬ外的実在世界の存在価値をまず当初から承認し、自己を、外的実在世界の一片として見なしつつ外的世界の法則性を求める認識的方向である。今日の知識と学問との母胎となつた精神であり、自己を識ることが直ちに世界への認識と結びつく精神である。キリスト教精神とは何か？ それは、人間的な愛と慈悲とを無限に自己止揚してゆく方向に、神を慕う心ではあるまいか？（リルケの一表現によれば「この方向が神である。」）

それゆえ、倉田百三氏の『出家とその弟子』のフランス語訳の序文の中でロマン・ロランが、日本の若い人々がギリシャ精神とキリスト教精神との新しい綜合を求めているとしたらそれは意味のあることだ、と書いたことを私は忘れ得ない。ギリシャ精神とキリスト教精神とを、生命の絶えまない流動へ映る二つの理念としてとらえるなら、それは認識と愛とであろう。そしてこの二つのものは、建設的の行為においては依然かえりみらるべき力強い基石である。たとえば数人のすぐれた日本の小説

家や学者たちが近ごろの支那旅行の印象の中に、フランス旧教の僧や尼僧たちが実現している文化面の、否定できない良い効果について書いているが、カトリックの神学の中に今も実りあるようにはたらいっているものはやはり、ギリシャの学問と慈悲の精神との協力するような一つの精神伝統であろう。この協力は意味ぶかい。そこでは生と美と、そして祈りとが一つの力になるから。そして、生活のささやかな実行の中に様式が現われ、その様式は観念を象徴の衣に包んで直接感覚へ与えるのだから。私自身カトリック教徒ではないし、また、カトリック教徒だった偉大なシャルル・ペギーの「敬虔な異教徒こそ真に敬虔だ」と言った言葉の意味もしばしば公案のように思い出されるのであるが、しかしゲーテやヘッセやケーベルのような人々があの宗教に対して抱いている愛着の意味を、認識と愛との調和に見ようとすることは、そう誤りでもなさそうに思われる。

2

一般に比喩表現が繁雑すぎて煩わしいと評せられるドイツ浪漫主義の作品でも、ノヴァーリスのような内的必然性のある、ユニークな浪漫主義者の作は、少し親んでみると比喩表現が真の暗喩力ダークフォースに基づいていることがわかる。宗教的神秘家の体験で重要な、一つの炎が精神の素材を互いに熔かすのに似た体験が、ノヴァーリスの『青い花』では形象間に行われている。そのため、一見古めかしい外衣の直ぐ背後で、今日でも人を驚かせるほど新鮮な照応的・交響的な表現力の実体を感じられる。回

想の世界に、ものとももの思いがけない出会がなされ、その瞬間に一種の音楽的諧和が生まれ出る。新しさとはこれである。——私はわが国の枕言葉の暗喩メタフォールとしての深い意味をも思う。枕言葉は、アランなどの言う移調トランスポジションの表現の重要さに呼応する美しい一形式だ。「急がば廻れ」という諺は、芸術表現においてはしばしば思い出される。

ノヴァーリスの作品が今日のフランスで仮構フィクショナルの問題に関して引き合いに出されることも故なきことではない。それについてベガンの『ドイツ浪漫文学と夢』のようなすぐれた学的著述も近年出た。またドイツのヘルマン・ヘッセが九年以来取りかかっている大作、『ガラス玉演戯』(Glasperlenspiel)は、現代でもノヴァーリスの文学が可能であり、かつそれは、新しい創作力によって生かされるばあいには、創造形式として独自の品位をもつと同時に総合力をもつ、ということをわれわれに示している。そこに何か「魂の故郷の音がきこえる」というとすれば、それは甘い感傷的な形容句としてではなく、知識的概念の対象となりにくい照応的関係体験が、詩的表現によって象徴的に照明されている、少なくとも指示されている、という意味に解すべきであろう。

照応の問題がまた必ず転生メタモルフォーゼの問題を喚び起こし、それによって倫理的・宗教的な意味をもって来ることとも興味深い。たとえばそのもつとも平明な倫理的表現は——「朱に交われば赤くなる」である。また、江戸時代の芭蕉と、俳道のあるく旅路の芭蕉とは、俳道への転生を軸として照応するところがあるであろう。

比較芸術学の方法は結局、照応に基づく方法ではあるまいか。回想によって新しく理念に到る過程

に、比較芸術学の領域がある。それは交響樂的體驗の領域である。わが国の文化世界でいっそうこの領域が築かれ鍛鍊されることは必要なことだと思われる。たとえば都市の美觀的形象や、ラジオが日夜空間に描き出している音樂的な心象が、それ自身思想の——（或る觀念の、ではない）——象徴として考えられるような方向へ教養は進むべきである。たとえばタウトが『日本美の再発見』（岩波新書）の中で建築上のいんちきとしてほとんど生理的な苦痛のうめきみたいな調子で語っているのは何だろ
うか？ 形象の実体とその象徴性との食い違いが感覺へつらくこたえたのだ。「凡庸な画面の前にいると、ちょうど伴りの政略にとらわれたときのような絶望を感じる」と、ブルデルやルオーの親友シユアレスもいつか書いていた。高村光太郎氏が先日新聞で、美術展覽会が興行化されお祭りさわぎになる一方、都市の健全な美の保存や建設のためには一般人が無感覺すぎることを書いていられたが（そして日本人は元来そういう素質では世界でも優秀な民族なのに、とも書いていられたが）このこともわれわれがもっと交響樂的な思考法を身につけることと連関するであろう。比例均衡の叡智は、照応するさまざまな象徴を、回想的に濾化しつつ理念へ方向づける方法の叡智なのだ、と私は思う。それは體驗の世界のことである。アランによればそれは「記念碑に倣ふ」こと、すなわち「学ぶ」とである。そしてクロード・ロランの一枚のデッサン、遠州の建てた一つの家はまことに記念碑である。古典の諸作品は人間精神の美しいかたちのための記念碑である。「思想の中には美しいがゆえに亡びぬような部分がある。そしてこんな部分に眞の思想がある。」これもアランの言葉である。

象徴性の賭け

「……理、性、と、か、宇、宙、と、か、原、因、と、か、物、質、と、か、観、念、と、か、の語に適合する唯一無二の一定した恒久な意味を確定することは不可能である。その結果、このような語の意味を正確にしようとするいっさいの努力が、結局、同じ語によって新しい別な思惟対象を表現するにいたり、そしてその新しい思惟対象は、それが新しい度合いだけ先の思惟対象と対立するというようなことがしばしば起こる」とポール・ヴァレリーは最近発表した『スエーデンボルグ論』の中で言い「概念的思惟そのものが象徴的性質のものだ」ということを指示している。

世界大戦後モラルの標識を失い、精神的に前世代の人々の理想から切り離されたあの西欧の未曾有の混沌の中で、ドイツやフランスや英国の新世代の人々がただ自力だけに頼って無の中から何もかを生まねばならぬと感じつつ努力していた様子は今もわれわれの想像力を刺激する。ドイツではフリー・バルのような、後にビザンチン・キリスト教の聖者伝を遺して死んだような詩人がヴァリエテの楽士として生計を立てながらダダ運動の先頭に立っていた。シュテファン・ツヴァイクがかつて私

への手紙の中に「現在、敵の国へ精神の架橋を渡すことよりもいっそう困難なことは、新旧世代のあいだにできた深淵に橋を架けることだ。しかし、困難の存在は、われわれがそれに克とうとする勇氣をも昂める」と書いていたこともあの頃の西欧の精神的混乱を思い出させる。英国とフランスとは、彼らの精神伝統に従っていっそう多く主知主義への努力に向かっていた。当時の英仏の新世代人らは浪漫主義的象徴の毒素と戦わねばならぬと感じていた。フランスの「エヌ・エル・エフ」誌の存在が戦後の西欧に知性の一中心のようになり得たのは、フランス・モラリストの伝統による批評精神があったらしい実証主義と結びつき、本来西欧的なるものの源泉であるギリシャの精神が保たれていることゆえであるように見えるが、私は今一つの大きい理由がその基底になっているように思う。それは改質せられ、鍛錬せられて、リアルなるものに耐えず賭ける力を獲得したところの象徴主義の精神であり、この精神がつねに文化の正しい素描性を描くことを努力している事実である。

「父かたの祖父としてマルスラン・ベルトローをもち、父としてクロアゼをもち、母かたの曾祖父としてギゾーをもち、母かたの大叔父としてサント・ブーヴまたはジュベールをもち、叔母としてドゥ・スタール夫人をもつとして想像して見れば」おおむねその知的境遇が彷彿できるとアンドレ・モローアの言った英国の作家オルガス・ハックスリは、戦後に目をさました世代の一人として文学経歴の当初から明確な合理主義者であった。そのことはこの百科全書の境遇にふさわしかったとともにまた英国の経験主義的伝統にもふさわしかった。そうしてそれは十数年前の英国で若い人々が自己の生長を守るためのモラルの衛生学でもあった。一時ハックスリは、バッハの崇高な音楽を音響学的に分